

# 過疎地域における居住地の選択 愛媛県久万高原町

1160388 伊藤 穂乃香

高知工科大学マネジメント学部

## 1. 概要

日本の人口は2010年に1億2806万人をピークに減少を始めたが、地方ではそれに先だって減少が顕著なものとなっている。原因としては少子化が挙げられるが、他にも地方出身の若年層が進学や就職などで都市部へ移り住むことも大きな要因として考えられる。しかし、地方でも道路が整備され、公共施設が充実し年々生活が便利になっており、転職や退職後のセカンドライフなどとして、都市部から地方へ移り住む人々が少なくない。そこで本研究では、人口減少の顕著な地域に焦点を合わせ、その地で暮らす人々を対象に調査を行い、なぜその土地で生活するのかを明らかにする。本研究の背景には、人口減少に対する施策の一つとして、中山間地にすむ人々を町の中心地に移住させることで、行政的な視点から効率性を重視したコンパクトシティ構想があるが、実現が困難な状況にあることである。

本研究で行った愛媛県久万高原町での聞き取り調査によれば、過疎化の深刻な地域に住んでいる人々の回答として、生まれた土地だからという強いこだわりはないが、単純に自分のやりたい仕事がこの町にしかなかったため、という意見が多いということであった。さらに、外部出身で最近この土地に移り住んで来た人の意見としては、自分が将来地方と関わりを持った業務内容で起業するため、必要なことを住み込みで学んでいるというものもあった。

これらを踏まえると、当該の土地に住みたいと強く希望しているためではなく、土地に対する思いや人間関係は実は二次の問題であり、彼らは過疎地であっても、やりたいことを行うために住んでいるというケースの多くあるこ

とが明らかとなったことである。

ただ聞き取り対象が、比較的若い世代を中心に行っているため、調査結果にバイアスがあることが考えられる。しかし、2010年度愛媛県高齢者実態調査によれば、過疎地に住む高齢者の半分以上は、健康でその地域での生活に生きがいを感じており、身体が弱ったとしても現在住んでいる地域での生活を望んでいる。また、行政は何を行っているか、そしてその施策はきちんと効果がでているかなど、住民がよりよく生活していくために何ができるかを明らかにする。

## 2. 背景

近年少子高齢化が進み、数少ない若年層が都市部へ移住するなか、就職やセカンドライフ等で生まれ育った土地に戻り、再び生活をする人々がいる。彼らは進学や就職等で一度都市部に移り住み、転職や退職後のセカンドライフとして生まれ育った土地や彼らの住みたい土地に移住する。都市部を離れ、地方に移り住む理由は多様にあると考えられるが、出身地に戻る人々のうち、「生まれた土地が好きだから」という気持ちで移り住む人は少なからずいるはずである。本論文では、過疎地域に住む人々の「生まれた土地に対する関心」という点に焦点をあてる。

## 3. 目的

本研究を行うことにより、Uターンを行った人々や、過疎地への移住者が、なぜ公共施設や交通手段が充実していない土地に住んでいるのかを知ることができる。また、定年等で退職した人が、都市部に移り住まず心身ともに苦労することが多い過疎地に長年住み続ける理由や、暮らし続けている土地に対してどのような考えを持っているのか

を明確にする。他にも、少子高齢化に対する行政の考えや取り組みを調べ、きちんと反映されているのかを調べる。

#### 4. 研究方法

本研究は、はじめに愛媛県でも随一の人口減少と高齢化が進む久万高原町について、住民がどの公共交通機関や施設等を利用しているかを調査する。次に、実際の利用状況をフィールドワークで確かめる。その後、同町に住む人々に、普段の生活や過疎化に対する考え、生活するにあたっての不満等の聞き取り調査を行う。最後に文献調査とフィールドワーク、聞き取り調査の記録をまとめる。

#### 5. 結果

##### 5.1 久万高原町の概要

久万高原町は平成 16 年 8 月 1 日に上浮穴郡の旧久万町、旧面河村、旧美川村、旧柳谷村の 4 町村が合併し現在の久万高原町となった。面積は愛媛県内で最大の 583.69km<sup>2</sup>である。主な産業は林業であり、道の駅や小中学校などの町内の公共施設に町内産の木材を使用して建設している。林業の他にも、冷涼な気候を活かしたトマトやピーマンの栽培、久万高原清流米として消費者から高い評価を得ている水稻を生産している。また、四国カルストや西日本最高峰の石鎚山の自然を求めて観光客が訪れるため、観光業にも力を入れている。春は新緑、夏は避暑地として、秋は紅葉を、冬はスキーなどのウィンタースポーツが楽しめるため、1 年を通して滞在型観光を推進している。

久万高原町は平成 16 年の合併以前から人口が減少していたが、合併後も止まることはなく、平成 22 年度には総人口が 1 万人を下回り、9,644 人を記録した。

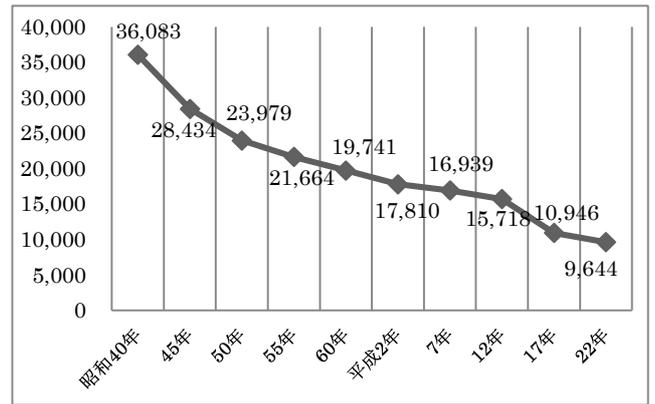


図 1. 久万高原町の人口推移

一般的に、65 歳以上の人口の割合が総人口に対して 14% であると高齢社会と言われている。平成 24 年 3 月末日の時点で久万高原町では 65 歳以上の人口が 43%を占めているため高齢社会といえる。年齢別人口ピラミッドは以下の通りである。

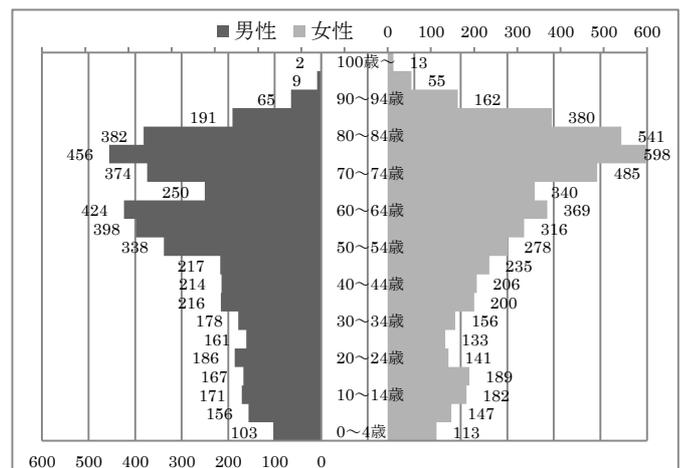


図 2. 久万高原町の人口ピラミッド

##### 5.2 フィールドワークの結果

実際に久万高原町に行き、街の様子を調査した。

まず公共交通機関については、JR 四国旅客鉄道株式会社、伊予鉄道株式会社、久万高原町代替バス、有限会社黒岩観光バスの 4 つの組織が運営し、それぞれ違う方面へバスを運行させている。他の交通手段としては、タクシーがあり、美川タクシーと面河タクシーの 2 種類がある。

また、平成 27 年 4 月に開通した三坂道路によって、久万高原町から松山市まで車で 30 分で行けるようになった

ため、松山方面のバスを利用する人は減少したように考えられる。もとより久万高原町を走る路線バスは一日の運行本数が比較的少ないため、利用する住民は少数で、加えて車を所持している住民が多いため、久万高原町内のバスは利用者が多くはなかったと思われる。以下は久万高原町の主要道路図である。



図3. 久万高原町内の主要道路

### 5.3 聞き取り調査結果

普段の生活や久万高原町について町内出身で在住の40歳代男性と、町外出身で久万高原町内に在住の30歳代男性の2名に聞き取り調査を実施した。

#### 5.3.1 40歳代男性(久万高原町内出身者)

彼は旧久万町地区出身で中学校卒業までを久万高原町で過ごし、その後松山市内の高校へ進学する。卒業後は久万高原町内で就職し現在に至る。まず、久万高原町内での不便さについて聞いてみたが、車を所持しているため、特別不便だと感じたことは無いという。スーパーは無いが生協とドラッグストアがあり、道の駅に県産の野菜が低価格で売られていることから、日々の生活においての買い物に不便は無いという。休日は片道30分かけ松山市まで赴いて過ごしていて、欲しいものがあれば松山市の店舗で購入するか、インターネットショッピングで購入するとのこと

である。久万高原町に長く住んでいることについては、特にこだわりがあって久万高原町内に住み続けているという訳ではないという。高校を卒業する際の就職活動において、希望する職種の求人が、偶然に出身地である久万高原町のものであったためであり、もしその求人の勤務地が松山市であれば久万高原町に就職していなかったという。しかし人口が減少し、農業に従事する人口も減ったことから、放置され荒れていく田畑が目に見えて増加しているのは、少し気がかりだという。

#### 5.3.2 30歳代男性(久万高原町外出身者)

彼は北海道に生まれ、平成27年11月から久万高原町の地域おこし協力隊として活動している。久万高原町の地域おこし協力隊は1~3年の任期で、町内の農産物や加工品等の生産拡大の支援や販売額の拡大に向けた業務を行っている。彼は将来、地方の特産品を販売する企業を興そうと考えており、起業への第一歩として久万高原町で地域おこし協力隊の活動をしている。久万高原町での生活で不便なことと言えば、近くの店舗が夜7時30分で閉店することだという。ただ、数ヶ月の生活で慣れたらしく、移住当初よりは不便と感じていないらしい。現在は不便さよりも、町の自然の魅力を感じているとのことで、旧面河村地方の自然や夜の星空が綺麗であり、久万高原町の魅力だと語った。

### 5.4 行政の取り組み

久万高原町は移住、定住を促進するために様々な対策を行っている。子育てに関しては、新生児が誕生すると1名につき3万円の祝い金を支給する制度や、生まれてから15歳までの医療費を助成する制度、他にも放課後児童クラブの運営や小中学校や高等学校への通学補助、久万高原町出身者で優秀な学生を対象に奨学金を支給する制度を行っている。また、空き家バンク等での住居案内や低価格での土地分譲、その他、新規農業従事者のための人材育成制度を行っている。上記の通り行政は、子育て、居住、就業など様々な問題において金銭面と育成面などで助成する制度を行っている。

移住や定住を推進しているが、地域活性化の第一歩として観光客を誘致する取り組みも行っている。例えば、平成26年4月にオープンした道の駅「天空の郷さんさん」には、観光案内やビュッフェ形式のレストラン、直売所やパン工房などの施設が充実している。また、先述した三坂道路の開通により、松山市方面や高知県からの交通量が増加したため、休憩ポイントとしてこの道の駅の利用者が増加している。地元住民や休憩として利用する観光客を合わせ、オープンした年は利用者が120万人にもなり、新たな観光地として注目が集まっている。

また、住民の家にある使わなくなった雛人形を集め、町の商店街に飾るという「くままちひなまつり」の第一回が、平成27年2月22日から4月26日に行われた。標高が高く冷涼な土地であるため、例年冬季はスキー場にしか観光客が訪れなかったが、このイベント期間中に3万人もの観光客が訪れ、新たな冬のイベントとして他の行事と並ぶこととなった。

一方でどれほど観光客を誘致しても、地域が活性化されなければ、少子高齢化が食い止められたことにはならない。実際に毎年町で生まれる子どもは30人程であり、年時点で高齢率は45%を超えた。主要産業である林業を活性化させようと、10年前から活性化プロジェクトと銘打ち機械化に尽力しているが、町内産の木材価格が上がることはなく、加えて後継者増加には至っていない。

## 5.5 考察

まず、久万高原町での暮らしがそれほど不便ではなかったことが明らかとなった。交通手段がバスかタクシーしか無い点では、町民のほとんどが車を所持していて、それが当たり前であるため交通に関して不便だと考えたことはなく、また、生協やドラッグストア、コンビニなどが一通りあるため日々の買い物に困ることはなく、インターネットも使えるためネットショッピングでも欲しい物を購入することができる、というのが住民の声である。町内出身者に聞き取り調査を行った際、不便だと決めつけて質問をしていたが、回答者は不便だと感じることはなかったため、ま

ずその不便だという前提さえ間違っていたことが分かった。

つまり、無いものが多いため不便なのではなく、その無いものをどう補うか、できないことをできるようにするためにはどうすればよいかなど、快適に過ごす工夫を彼らは自然と考え、身につけていたのである。極端な例で、都市部には様々な店舗や娯楽施設があり交通手段も充実しているが、久万高原町のような美しい自然は無い。同様に、久万高原町には雄大な四国カルストや天体観測ができる施設、紅葉の名所など自然を満喫するには十分な環境が整っているが、交通の面で不便である。どの地域にあるものもないものがあり、ただ単純に、久万高原町にないものが客観的に見て「不便だ」と思わせる要因となっただけなのである。

## 6. 今後の課題

現段階での調査では、比較的若い男性にしか聞き取り調査を実施できておらず、退職後の高齢者や子育てを行う女性に対してなど、様々な立場からの意見も参考にしたいため、引き続き聞き取り調査を行っている。また、Uターンでの就職者や町外からの移住者はいるが、久万高原町で人口減少が進んでいることは事実である。そのため、他に行政が行っている施策はないか、そしてこれらの施策はきちんと住民に理解され効果がでているかなど、久万高原町の住民がより一層快適に生活していくために何ができるかを調査する必要があると考えている。

## 引用文献

図1 政府の統計窓口

図2 住民基本台帳

図3 久万高原町ホームページ

平成16年版 少子化社会白書

## 参考文献

国勢調査

平成22年度愛媛県高齢者実態調査